浮世風呂 二十四

100

9807

女湯之巻自序

鶯に著て男湯に浮世風呂。

這入て大入ナリ。發客腹をば温ゑれど。

湯番のあるゝ火と共に焚落ゆ

となりしまゝ。終湯の入憤ひ今世に

本舗 鳳鳴館

噫嘻惜哉。其燒版ハ東も南も涼湯
ゆをぬ間ハ今一編と。二度入の法方様
より。休の翌を俟て出迦里頻之。
湯汲の柄拘。作者ハ其毫まぶらくと
埒あり次ハ。六日の菖蒲湯なり

後也。弥曇の桃湯蹟篇なれば。

末あがらぬうつがらぬうと。草稿を急

ぐる長湯の迎に彷彿たり。然ど

小ち智囊を糠袋ほど絞とも。

久しい物日の十二銅。ちよいと捻て趣向

なし。勿論視て看もあらぬ女湯の
別世界。こんな物でもあらうと。淨湯
の樋の當筒棒が。竟に二冊ぢ草紙と
なりぬ。此節薪高直に付。お篇の余材
を輯て二番仕入の女湯を拵へば。

行の早拵さしとなりしに成爾

文化六年三乃重陽（ちやうゆうぜんで）の後五日（いつか）の

急案（きうあん）江戸（えどまへ）前の市隱（しいん）

式亭三馬題

女中湯

# 女中湯人物之圖

附そいふ

小児と養ふに丸薬の苦きと。水飴の甘きとあり。されど書に譬へば。三史五經は丸薬の苦味にて。稗官野史は小飴の甘味なり。蓋世に女教の書許多あれど。女大学今川乃たぐひ。丸薬は口に苦ければ婦女子も么に味ふこと尠し。這女湯の小説は。素より漫戯の書といへども。么麼用ゐて讀む刹は多飴の味ひ易く善悪邪正の行状は

[illegible]

吾ありをも好歹ともに改めなべ教諭の捷徑とありぬべし。

又強異見ハ耳に止めぬ壯者も含笑ある教訓ハ。聽くに

倦ざるものなれバ。自然と心にとゞまるものなり。人ぐ假初の

戯冊子も心をとゞめて味ひなりて。大益必らず小益乃

中にあらべし　云尓

此書初編ハ文化己の年に肇基祝融氏の怒りに觸れ

板面ことごく烏有となりぬ仍て再び增補して上

梓せんことを求まれり　四方主顧の君子發市の目試

俟て需めなりしバ發客乃幸甚ならんと欽回

# 人相醉狂集

俗ゝ　百はら

まれハ百はらといふて男女
たがいろくのそうしきかかと
あづき其相のかたちにおもを
あらき詞出をくらへされバ
ひやうひやくのおやぶ国
とうしゝろぶりはよき本之

# 劇場客者評判記

二種共　三馬作

○草稿あるぞ出来仕る彫刻
しりいはぎ近日賣出しけれ

役者ひやうばんきのひんかしくに
ぐくやの方から見物の人ゝぐと評
しける古今未發乃人物評林
おしわふ人の子差万別おしき
さぐさと後ようにしてひとりく
の公のちの藝に見えて仕うちの
こんさん五りんものゝ見切者より
ひらぬりでんぶうのんな郎
それくの意味とさぐりて例乃
とりしきゑりよりしけれ

貸本尾銀

# 諢話浮世風呂二編巻之上

江戸戯作者　式亭三馬著

女中湯之巻

## 朝湯より昼前のありさま

物ゆゑひの百さんだり

一切成就秡極豆穢毛滞無礼波穢者有羅之内外

乃玉垣清浄登申壽一天四海皆帰妙法南無高祖

日蓮大菩薩南無妙法蓮華経ノ〳〵願くハ此功徳

を以て普く一切乃衆生に及さん南無阿弥陀仏〳〵

南無阿弥陀佛。浄土宗やら。法華やら。八宗九宗

入はどこふ女湯の障子と明こく。そさむいと云ひなぐら肩と
ぶれくとして入るハ。何文字とる巻何とる名若るべき
十八九の白歯。 といふ若模根。謎染の
新形浴衣とかゝえて。「ヨヤお鯛さんお早うおざひまもす。女ハ
居おやまうらしきもの 料理屋の娘 「アイゆふべハお祝むらさらす。いゝ
でも木の生酔さんハ夜がふける祝へ 「アイサそれでも癖がなくて
能上戸さ。粕を湯さんの女ハ酒乱でないから能よ。あれからす。
こゝしと送て出る中。新道のまぐり角で一ぷり何角アしく。

とうり内の前まで送てさ。「いく兼ぜんな。きろい世話也
ぢぢ
爺ぢ子。呑助さんのへぞ養と。飲六さんの悪ふざけあへおそれる
孫へ「さうさ酒香さんの甚九も騒ぐしいよ子ヱ「いろでもさまい
ハ鼾さ。ヲヤおまへモウお仕舞が出来ス子「アイ。ヒ新お掃
さんが一番ま来て呉さからサ。おまたんのハ雅ハお猪ハせぶ
「お筋さんさ「いろそ恰好がよい子ヱ「なアふ今新ハ鬢
ぢうら。撈手が遠ておりアしい兼ねさ「人が鬢ると上手でも
ゴるいものさ。あろち此向ておるんせ。ヲヤいつそよいが子ヱ「一が

あが　まぎ
上りなさゝ　ぐやア　なのいかす　さま　いへ　ます　ぐざいまれ　ハイ　おゆかりと
ト　殆下　話をおかして　さま　ちつとおよんなまいまな。宿ふ母が居り
うどぐちへでかれ
ますよ。ハイさまうなりト　捨せりふあそ　風呂へいる　あとうち来るへ。是も出なり。仲なとみえて。辛たかり乃
あらえ
白歯。まゆ毛の上へ小ぢのがとまつて。たるのとさのさめ志へも。ぶんくあるくくえ
ちんで。又つやうをくろく。白歯も黄足よるつとれど。ぢつじだえの眉毛が。アきんざ
だかりで。頼中の七雑をかくそといふや。中折の下をぐくくといけさうぐしく
たきとてく。湯だんのくそさみはあいさつし。ゆきをあうり出して常をときなすがら。風
呂の方へおりひ。おぢち　さま　お三味さん。ぐ。ト　いくどもさまもぞ　お三味さアんぐんぼう
えんだつとてしまて
め。あちの中で　おさま　アイヨウ。お撥さんかお早いの　おち　おや　お早いじやア移へ
まだんの娘
ぬ。ぬめくといふものハ志よまんな者ごの。さうしなせへ。ぢん　ぢん

ぬ。おめへといふものハ志ゝよあんな者ごのさうしなせへ
はきを志らねへが独のさぶれ。おれおど待て居て呉なりといふのか。
「それでもおめへのお飯ハ守が婦へものを「アイサ。大喰どうら
称。左様さ至極おまへさまのが仰むなる助さ。ト いひなのがと風呂へ入り いまの。
おめへの面へよろこらの。おめへ示のかさんがいふあれ。ぞろこ今わき
中ゝ。今志がさまでおめへの来るのを待て居たれな。どうもあの子ハ
志よあんご称へ。何の角のと嬉しがらせる奴さ。ホンニ おめへのかさん
せじ者ごのう。いつそ世るみが独ゝ。おらが示のかさんと来ちや
小ごごアつかり云てうるさくつくなるりんじやア称へ 独かな。

その代よとろぺんが亀が紐ひとり紐ひとり「あんまり亀が紐さ
かゝら。是日一夜かくさんに叱られてぞうり長ひとり。とろぺんの
見負をしてやアねへが。傍で歯痒い様だよ。コウくおめへ
ゆへべハ大酒屋り「アく。注に曰アイとりふ返答をアくとりふ女の通り言 おめへハ「アくしハ
蛭子講の坐敷さ。丁度八ッよ。次つてハな「アくしもそちこち
八ッおどもと「むり酒をのんだらと是ゑ。いまだよ目が腫ぶつ
てくよ「道理で色が悪ん「すくあつい「あつい。弱虫だのう。
弱ぶやア孫へいなか。おめへもあつからまが。此子の様なハぢの

はつたゝ子ハ祐へよ。トシとくちつとうめて、おこまし。湯汲のどこ
今うめほし モウなりません 「今うめともさまざい。まじ
わつりらうめや。おい祐へ三助どのう 「三助といつちや ア。猶
うめません 「そんなら三助大明神さ取おがえました。此うちあを
「サア かきまつしのさい いやどよ。誰がさ廻せ物か。コウくこへ
まづこな。あの来る所へ。アレサ。まんがちな。コウ お三味さん。おめへ
一時る何のこ 「芝居へ 「フウお客とり 「ナアニ 様丸で
「ヲヤどれと 「猫文字さんの所から 誘いまとうらの。おづる

さんと書たばさんと。一所に切さいる。おめへの取人を考へたら。
者通さんと堀の内へ切ことといふから　さうさ。とうさ。見ん孫へが
誰が結　「紀の國やさ「さうざらうよのう。業腹な。詠乃
贅り同も見ん損なろこよ「芝居が大稲さから。九三へよろて。
三さんに礼を云て出たらの。二階で立へこくといふから。作向て見
たら。大勢首を出して居たいな。声色の弥七さんと。のし松
さんが詞をかけたろけ。その外は誰が居る早くかけ出して来た。
ぞくこゝあいやうぞ。サアく出やうく。ト　ぞくこゝあいやうぞ。

段でき(か)、ちよつとききまして〽名の男 サア お撥え脊中を出しなせへ。ト あふひうける〽コレ。

此人やおねが先へ来さうめのと。〽すぢしの男 どつちでもいゝ。どうぞ一儲よ

はく悩る者ぞ。此すぢしの男八木年ぞへんとふよぬけやうといふ人物。このくよ四五年も長年をるところ女中が二周よお母さん頭づゝをもいゝけ

ぞんざいが通ふさうもん〽ばち コウ。丁寧に扱て呉なよ。けぞんざいなまへさん、二三べん〽男ふてえ撥

さすらかとぞつてさ。傍とぶつかけてお仕舞よさるのう

で、銭を、垢ぞつても毎日出る者でねへ。〽撥 さうきひなさんな

お撥さんの猫脊中ときてゐるから、鼠の糞のやうな粥

がよんなるよ。〽ばち 虱でもお金。銭口のう〽男 やすい喧嘩に

せうと思つて。モウ〳〵水の吹かけ競ハ悪ぞ。ア、やうまつい娘
どもぞ。ソレよし。サア〳〵お三味さん脊中を出さつしやれ。
ソレ出さつしやつさ洗ひつせへ。ぞんぜんな恥又ごのう。ト
ひかぶけれバ。三十四五のくまさま。ハッぢりのむすめを
りやくす。つれ二ッぢりの子をぶきて門ト
あぶいぞ。ナレ〳〵あぶりつこのう坊や。ヤレ〳〵。門へ這入つたら
温ようつこぞ。ト
おかまさん此アラハ
陽やのうまさ
ハイ
お早うござんすと。一夜日ハけしからぬお空さぞござんす。
ハ、
ぢり子。ヲホ〳〵。ぴつもたぢん事ぞ袖ぞお王さん

ぶれお手習(てならひ)ハお休(やすみ)く 娘「イヽエ ちう吉「ハイアヽおあまけだね 冊れ

強(ゑう)ゞやうよう私(わたし)の目(め)つまでものんでハ体(からだ)をたがりますゝ今日(けふ)も

ちゑんとお爺(とゝ)さんをごまかして。お体(からだ)を残(いと)しますゝ。兎角(とかく)お

ようぽ母(かゝ)様(どの)がおやりなさつてまりま承知ぞれぞれ私の

ゐふとハさうぞりお取上(とりあげ)なさ 長吉「まアそのをづさおまへさへ。ゑゝタガ。

かわつた物で女臈(ぢよらう)のお子(こ)ハ兎角(とく)爺(てゝ)親(おや)の可愛(かわい)がるものさ。

アハヽヽ。お枝(えだ)さん。何(なん)ぞお持(もち)ぎね。お薩(さつ)ハヲヽ玩物(いてあそ)をお持(もち)ぞ。

ヲホヽヽ。いつそ気(き)嫌(げん)ぐ。よんご人相(にんさう)よしで玩(いて)お子(こ)ぞ。アレく

ひとりでお笑でさ。サ。ヲヽ。お杉さんはよい〳〵、お子だぞ。ヤレ〳〵。

「母 サア〳〵、お玉へ衣をお脱なすゝ爰へおよこし。ソレ、お襷でおいよ。

お杉坊も紋の足袋を脱で。ソリヤ。お胴着も解て。ヲヤ〳〵

あんがいいくぢもねへ結び玉しさ。お襦袢の紐が解ぬ物ぢやァ

強く。サア〳〵。ソリヤよし。サアいゝ。早くお湯で温よなりませう

アよい〳〵。よい〳〵。

● 八才ばかりの女の子門トロの障子を明て

「風呂の内より

「馬 おつかさん〳〵。トよぶ

「母 あんざお馬か。何しに来さ

「馬 あの私をあのう。

いやさうかね。お客があるのかよ。あのう。早く、おあがりよ。そして

おのが所(どこ)へも道(みち)よりをせずとまたゝと今まゐりと　仮「アイく。
今(けふ)はまだ張(ざ)が来(き)このうちまくの通(め)へ来(き)ても直(ぢき)にお
迎(むか)ひござるぜ。そのうちそしておのれお手習(てならい)まれしやッ教(をしへ)ろ。
何(なん)でお帰(けへ)りござ　馬「ハイよ様。おのウ。お清書(せいしよ)ござる。清書双紙(せいしよざうし)
をとりふ　仮「そんならば早(はや)くいろいろでお習(なら)ひ　馬「アイ。そしてす。
あのウ。おとつさんが手。あのウ。おいらは褒美(はうび)を。お弁当(べんたう)にして
お屋(や)りと　仮「ましくの膝(ひざ)。雨(あめ)の降(ふる)ねへ日(ひ)は。お弁当(べんたう)は入(いり)ますま
せん　馬「ウ。そんでもトヨウ。おとつつあんがお弁当にして

おゝまたな。ヨウ。おまへなんざア。おとろぎんがお弁(ぐん)南(さう)ふしてやれと
おゝ云(い)ひご物(もの)を 辰 チヨツ 女ちまい。そんなのらお弁南ふしてやるかと。
おゝ菜(うぢ)好(このこ)へなくなるいよ 馬 アイト 出(せ)ゝ・そぐるいるひと 巳 どこのもお弁(ぐん)南(さう)
でおまりゆきよ 辰 ハイサ。わりうるさくてなりまたん。いなかを
でも。お兵(ぐん)南が遅(おそ)いと宿(やど)ぐるまで来(とり)りましたな。さうしく
えらさらおろさらお師(せう)匠(しせう)さまへ持(もつて)りてとべました 巳 ハヽ。又
雨(めあ)降(ふり)風(かぎ)ふ(ま)ふへ。持(とう)んざり何(なふ)角(ふい)波(いと)さねで。お兵(ぐん)南(さう)も往(ようぐ)ぐるいました。
ぶ。菜(うぐ)がなんざへ角(ぐ)ぐいと。尾(のぞ)を好(こぞ)がらるさうぐるいまたよ。

水入へ。挿せうら花を買て呉るの。肉桂が同しいの丁子
水にするから。丁子も欲てのどさぬぐの私ぶりてでおくせい
仕果すれ「いへさ何処のもその通りで二まりすれ。今紙ぶの
物成紙ぶのと蓋にもしらねてる切にまざいて差ひ捨ました。
夫にまたアノ。贅り絵とせらせて子。あつちへちらちへひらくり
かくつて。役者の早がわりの絵がござりまた。夫をかまへさん。
買行くし。箱に一ッたい備ひてき私も行が渋りましたい
子。三だん目の兄どのハ又。合巻とせらせ草双帋が出てびに

買ましが。葛籠に志ろうり湧りました。ヤレ芋國が紐の
國貞も紐のと。画工の名まで覚えましてそれなく今乃
子どもは功者なうまでございまたよ。己さあうさねへ。私どもの
幼かな時かは。鼠の嫁入や。むし咄の赤本が此上なりてござる
ましたい。辰へさ。何るも揃りかわる物でございまたよ。鬢挿を
入たゞめさるは。近比の女ふ存ましたそのまゝは一面に。己アイサ。
そんな摘鬘でございました。それがおまへさん。鬘挿ぶの法籍
ぶのと調法なことになりました。櫚子に髪が結れまたも。あの

島田ハげしの形なるゞハ役者の鬘同様さ。頸へ乗せさえ
されバ手つゞるに髷が出来る。イヤハヤ利口なるゆさま一頻りて
頸の上へ髷がおりかぶさつて居ましたが。又むかへ皈ッて些ぞかり
黄て来たるゞの島田になりました。その上に上方風を好
ものゝものも出て来りました。ホニシ稱り意なものてござる
ましたよねへ京形どの京かんざしどのと。何でも殄しの
なるゆゑ好ましたお江戸の人ハお江戸の風かいつかでも結う
ございましたよつゝねへまでございましたが。ハ熱服のお姉さん

ハ。タシカ。お片付なのさいましたッけ子「ハイ。お慈な所がござい
ましたから片づけました「お一人ッ。もお身のかたまるがお幼体
めさ「何でございましたか。モウ女の子ハ今ッ食ひごとゃて。
宿でも小どだかりゃてをりまして「先さ女ハお姑ばがござい
ましたか「ハイ。おご若姑でございまして「それハあのお子さん
お骨が折よせう「いへもうどんど。幸立のよい姑ばでござい
まして。夫は聟どのハ。一返どうらくをして以上まつて人ぶけれ。
ーでも[illegible]て居ましたから。大きな仕合さ。夫婦中も[illegible]

ようございますと。それは何より結ぶさ子。よりや姑に此がむかひ
かしくても。作夫婦中さへよければ納りますと 張ハイサ。宮
頭月常を殺しましたのな 巳ヲヤく。それは幸ねぐお悦びで
ございます次子。結くお毒どもをおこまぬ付なさいますよ。五月
ゐるまでは何とこえてもあたりは殺さねれど。鰆のもどは変しも
おいづけなさいますな。お乳は侍りますとよ。実母散や婦王
散も。おまへさんがお子もちだけは。作如左はございますと 張ハイ。
私ゆも合ひ茶でございますが。てりあり町の足貸やで奏る。

血の道の茶が結うござんすと。看板も出すれをりませんが。
結く人の志つてるお茶さ。逆上なのでゑ極よいおくすりで
ございますと。あのお茶のお蔭で大かよい人がございますら。
方々へ教て上ますと「七夜の内よ法けましが。乳も出る。リシテ
よく志たりも忘れて乳口の明くお茶がございましたけ。
アヽどう忘れを破ましこ。何処でも有とも「ヘエそれが尾張
町の平松の黒ぐすりでございませう。あまいよいお茶さ。熊
の腹帯ぐあ。子供のお守ぐあ。お雛形ぐあと。それまく

有ざらい形を方ぐさうらお借りまゝ。私がとびく産を
殺ても。子の産は何ら案じらきまして。童様のうるいものぞ
ございませよ。その筈さおまへさん。お産れなりさうらぶ。産湯
を徳利に一盃おとりなさらして。胎衣と印一備にお埋なさの道。
幼さ奴がお乳におとまりなさらぬといふお呪咀でございました。
私どもは兎角に子育がなくておまりまはよ。ホニ、お毒しい
るなぶ。夫でも印熱臥がお獨ござらッしやれば沢山でござい
ませ。殊に男のお子でいあり。私どもは女の子が三人男の子

二人でございますが。そのうちにも女の子は。ぶんにく生れるから
死ぬまで厄介さ。いへ女の子が幽楽ぐで能うございますよ。
おまへさんのもお二人男のお子ぐらう。二だん目のお兄イさんは
丁度結お弱とりさ。私どもの無所どのも。世話だらかり
ありせて二まり切りまた。けにも晴にも一人の男ぐけよ。おまや
かしも幽公にも出しませんから。今での後悔さ。利口発明
でも人中を見ねへじやア役に立ませぬ。設るるものはあらねへで。
[illegible]切苟なれりまた。[illegible]ぐらで一盛りを

おどうらくでございまさものさ。私どもの二家同も人中が茶
ごとかして。本店へ出して茶まして「ヘエ」よく長しく御奉公
なさいまさねへ。いづれサ他人の服とえねば子。他の想像が
ございませんのさ。ことへサ本公人を出へばとても子。アガ身を
つめつて見ねば。他の痛さが志れませんかな。どうしてもモウ。
親の御親離れぬものへ。痛さ痒さが見りません。御奇持
に御本公させやなさいまれ「ハイサ。只今のがでいよく幸拖
我まさ。宿でまびしいだけに子。宿ありの外は内へ来るなりと

ヤ 往(つけ)ましこうら。近(きんじよ)所までお使(つかひ)に来(まい)つても内(うち)へは寄(より)ませんト。
たなりなるがく 下女 おかミさんエ。式(しきて)子屋(ヤ)の馬(うま)ちゑ弟さ夜が入(い)らつしまい
下女うけきまり
ましたから一寸(ちうと)お坂(さく)んなさいまし 辰 ヨイ。今(いま)行(いく)よ。あれは現(ちう)ほど
な。二度(ふど)三度(ど)のお迎(むかひ)ど。ホンラくとんまりと湯(せ)へも這入(はいら)ません。
ホンラ。コレく 森代(きよ)や。おのいの。お茶(ちや)のお家(いへ)をさつせへよ。
下女 ハイく ト 出(ぬ)て 辰 さまうなるらお静(しづか)に 巳 ハイさまうなるらお宿(やど)へ
よろしくおつしやつて下(ぞ)さいまし。存(ぞんじ)なるがらはふ沙汰(ごぶさた) ト 別見る
水ふねのうさつきに。ぬりとこぼしなるがら。 おださんおめぐり 丑 ヨヤ

おださんお早かつたの。いつのあまま来なのとつた。ト おなのいだ
だあさ夜。ぶのよおださんくのあいさつ 「ホニ おださん。此頃おださん遠ぐ
なりどちらがおださんかねからうらだ
しいの 「アイヨ。おめへめんだいがうるかつたでやアねへか 「ソレヨ。
そのあまよ。何宮う年病ごらういな。同ハ悪しの。足腰しを
ふ自由なりの。かつたるまでやアねへいな。嫌しがるものハ嫁年
さ 「何まだその年じやアねへいな 「いつごとおりひるさる
「サレバ。おれよりハ上ごらうよのう 「アヽ。上所ハ一まつり遠ハア。
宮う丁度ごいな 「八十か 「サレモ。かいのさうなををいふ

おだそんぐ。七十よ「おや。おや。おれハの去年まで五十九
ぐつけが。元々六十ぐヨ。おれ来年ハ本封ゆりどちう
といふ。うれさぐ「此おだそんハ弓麻なことだつうりいふハ。ポニく。
いつも若い元氣ぐ「コクくなくてき。おだぐ四十九で伝漢へ
娘入といふれどの。六十ぐ脈が上ゝよのうおだそん。ぐ
「おめへハいつも氣さくで狂よ。白髪ゆへなつても氣ハ
若いヨ「氣爽ゝ。すてきたらねへるぐ。なんでも
こちとハ貪惜しねへのさ。アホ油でもなのとつて雲ら一ぺん

おしやらくをする事ごものを。嫁まわり口があらばおだまん。
仲人しく呉なよ。鬼も六十今が婆盗りぐ。アッハッハッハ
「ハ〳〵。あんまおめへは後生がよろうヨ」なアに後生も三
年もうまふまつ。死ぐ紅は猪もまるがいゝ。此世のうまさへも
志れねへものが。死ぐ先がどう知るものか。麻酒の一盃ッも
呑んで。快く寝るのが極楽よ「それよ。おめへは些ぐも酒
がいけるぐけ事の打ちうが遠ふ。あちとは事の晴れもうが
祝へ。年が年百こさくして居るぐ。ホヒラく。えしてでもねえ

ア。完らく。娑婆に倦ド果さ「ヲヤく。此おだきんまや
今ッから娑婆に倦てつまるりんか。死ぐ先にハ蕭ゆ夏に
りとお近づきの娑婆に百ヤでも壽をとるが紙わな「ヲ、
否なるのかな。モウく。志もぐいゆぐ。此二とも早くお如來ヤ夜の
お迎をまろのさ「そ。何のたろくなりくぢのねへ。死といくといふ
人の。死しぐろと例ハねへ。お迎が來てら。完らうとと待て
呉といふどんべい「ウニヤ。ゐんのとさ「死で見てとぐ。生
たがるごとらう。進此しさ。と云てハ後の娵を悪いふ。ゆうな

めんぞ。其が来ましば冬が秋といひし。冬がこれば夏が秋といふ。

人間といふものは自由ッこうなるすぢつりいふおよ。こちとらは

不可息子や嫁に云て吹せるのさ。子めへこちらはの。おれが倦く

居る内にうまい物をこんと喰せるとの。死ぞ迄で同がさめるな。

お佛檀へ。お盛物を並立て。ナニが芋やこりこ来を削込ぶつて。

仏にあつて食ふ。やら食ねへ。やら志ましねへッ。精進日をつとしれて。

油揚を一枚燒て肴にす。お仮や七色菓子を上るよりか。生て

居る内に初松魚で一盃飲せる方が。遥に功徳ぞと。ぞうぞ

らうおばさん。さういふもんざうとの。肝(やらう)を帯(どう)のもよく孝(かうく)れて
して賣買(もゆうべへ)を精出(ぜ)さしハな。毎日(めへにち)商(あきなく)から(しく)ゆりあれの。何(なに)か志(うしと)
牛(ぎ)の皮(かう)へ買(かう)て来(き)ての。サアかさん一ツあがれと一合(いちがう)も寐酒(ねさけ)と
のませるしのト。おしまれし泪で泪ぐまるおもひき あれもおめへ。前(めへうさ)方ハちろとどう
らくごろけぶ。今(いま)ぞハ塩(しわ)が志(うし)まる。それハくおとなしくなつて
よく拵(うせぎ)ませ。爺(とう)ざ夜(ちや)は早(ちや)く別(ほう)ましのが。あれが身(と)の志(うし)まり
あもなのつこのさ。其(そんぞ)代(ぞ)はおまぶあれを育(そぞ)るあハのうおぞさん。
海山(うみ)の若労(くらう)としてくなんとしてく。なのかく生(なま)でさしい

るまじやアなすかつと。それでも生立の悪い肝命なすぢ。おぼつ
ぷで挫びおりて。ひまごま役にも立めへが。早く了簡が付こ
でぬれも直も反為さ。夫にまさ娘が直な者での。氣晩よく
氣成つけて異るからの。是がまさ二ッの安氣よ。あれもおめへ。
龍の糞形屋の。足右馬つさんの媒人で。不幸としこるのを
貰ふが。宮も足りけ三年になるのは。かどうぞ孫がおいれ
ご。埒の明ねへ夫婦さ。あれも授り者どうぢ。ひとりあしがつ
ても無い種へ生来稔へものよのうおばさん「さうさ。自由に

なるねへものよのう。おとが内じやア。おれが骸がきろ移へから。
守が一ッ出来祝へのよ。年子ごア。ホンニちつとおとそこけ
志てへ住よ。先の妹が妻て行く子が三人よ。今度の嫁が
續て二人。まゝおめへ出来そうごぜめて住るのでも精出せば
いゝが。大酒食ぐうら。五日も三日もなまけ出さと細工も
あがつたりさ。かゝアどのハ長屋中で評判の引ぎりよ。うねが
嬰児実なまハ祝へで髪改だらうり作り立て。亭主ハがる
と外さるか。桑小便もかけるのがしで。志めしを一ッ洗ふでもそ

なりし頃を食へば搖紙つれ出して モウ嬰児を脊負出す。誰
も仕人がほへかゝ。せうとなりしにおきが取り始末をしれば。
大勢の子持を横に備て。内のゝ一紫も揃へねへ。誰が大
勢子を持てといふりんか。もぐの好で子を拵て自慢らしい。
あれきも志ねへといふことさ。あのまゝアざあをえるせへ。おめへの方
へもわぐらうが。推算さん亍瓢さんといふ天窓をしてなけ
堂の一ッてうらを忌穀に肩切て仕まふぞ。忌物ものおめへ。
身ぶんまくをよくしれば。ぶぐむさくもなりく。小ぶろぶりと

洗濯ものが忌ときるのでいるな。洗濯抱い盃け。針をひとろ
持たべをしたとねんご。商賣あがりどうら。大かた子も出来めん
し。教ともちろとゞ絶物も出来ずうと思ろうが。何が出来
ずうズ。出来ぞともいて子ハ出来て。ようしゝ雑巾の紙通も
ゑ。汁を一本持せると。畳屋さんが端をさきて世う
ぞ。口ハ連者よべ。ヨらく志やべつて。人が一言いへハ十言程
づ口答をするゝ。ホンヲく。肝の煎ことるよ。味なり其塗盆
の上で鰹節を撥たり。發居の上へ吹売をたいたり。

當り合のものを枕にして。いけどうくと置藤さま許の中へ
へいぴらつぴらと疼を吐て灰でづるぐと鳴がしての。丸いものを
いくらも搾て主ぐらう。おまが頭ぐらう思つてハ堀出して拾ひとが。
いぢまかつてお竈さまへ液を吐いな。霄ッだりの軽藤坊と
きてゐるから。人を集めておりろくも殺へ芝居だるりしを。
ベェんくとしてそのあげくハ主ぐらぶつかけを食てくのと。
さんざつだらあだれ舎ぐしてお藤ると富鮒ぐ。恩子どの
の藤云と掛合よギりく歯を咬といふもんぐらう。女ほし

くて寐つかれねへ。その合ふ子どもらが目を寤しく。
ギヤアく吼ると。あつちもこつちも一時に泣出せ。サア夫でも
起されへじやア目がさめねへ。それじゃんどうら夜がな夜一
夜騒ぐしくてなら孫へよおださん。いけな。夫でも夫婦
中がよくハこつちの志つたことじやアなし。打遣く意なし。
おめへが世話せきるつらアヽ何おまいかまハ孫へのさ。夫婦
中がよくハ夫婦喧嘩もねへ筈だが。親子喧嘩の合ふ事
あハ夫婦喧嘩さ。出しゑへも志ねへくせに出て往といふ

尾くどのハえくびつてふてるの。その経を科も弱く切燈へ聞て。
晴くもねへものゝ。ぞくひ明ぐなァんの角のと燈を抓を
込んて。此宮い油をぞつぞと減らせう。まつちらどのハこつちら
どのであらけちとして。傍にある入物小鉢ハその度まぶちこすとも
ご。瀬戸物燒継と塗師屋ハ常得意さ。あれでもさきねへ
もんぐが、あんまくかゝつきり章の俵まるアるが後へ。ハテ。そんな
とは苦労をとるハおめへの損ぐよ。柔で気が俵らねへのぶ。
後生の所ハどと此世を極楽にしなせへ。おめへが後羅を

勝ことと内中が納ら孫へうらぶつぶり地獄の苦しみ。
おれがせうま家を持ても是でも姑をせまいといへ猪ぶ。
おめへも六十年のとへ廿月ごのう。そんなら六十年あとの
家になつて。おめへが娵で嫁を姑のせうまあらふ家になれば
志ち面倒なことへ家を納めるとあふ娵をえてあてがふ
かとへ。姑へ遠くへ退居るがいゝ。兎角姑が口を出せと納
らねへよ。おめへ死ぬくといふから死ぬ家になつて居れば。
何もせうまいい苦いねへ。おぜさん。おめへまでも娵の異員を

しるかゝ。ハテ。誰が見負をしるものかけ。夫がおめへの悪
癖ごアな。おらア女ごけまで。男の女うごうら。悪癖なこ
ハ嫌ごそんなこと。いふ僚に大般若経の建立あでも出な
せへ。内に居るから悪い。おいらハ毎日お念仏ごハアそうごそ。
と囃して。征をしていて出なせへ。糸がたれてとんご粧よ。いつ
まで活るもんごナ。そんなるもハさらけ来て来なせへ。ヱヤふも
立ねへ。ぎさむくなつたおめへ寄うおあがりか。お十夜ハ
来なりせへよどうせ勧伝坊がれを持往ごらう。アイ。どうぞ

して乗りてくめんど「めんどゞやアねへざろさと出りける是
ト風呂へ入り●三十ぐらゐの女房人からのよい風ぞく。たるの下をなりゞくのぞしてかゝあげのあたりをあらひなるがら「いね「ヲヤく 急ぎ お祝
さんでござひまさとゝあのお子さゑハかしまんやさねうちそ
おそ大きくおなりなさんましたまモウ尚年おいらでござひ
まさとゝ「きぢ「ハイ九ツよなりまはヂおくゝ「いね「お宿ありでござひまさ
り「きぢ「ハイ三夜泊りよお隙を頂きましたこれはよろしう
ござひまさと踊とやさとものハおちひさひ門からはまゑがでも
とよろしうござんまさとねへおいらからお上なさんましたゝ

「ハイ。六ツの秋に奉公に上ました。「ヘエ。よく出ひ切て子ニ「ハイサ。
乳母を付て出しましたから。只今までも此奉公が勤りまきたが。
完う早。早が仮りでさまりました。「イエサ。やんちゃんが祖う
ござんまきたのさ。志りしお乳母どのが大体でハございません子。
何ぞ。此稽古へどうなさんまきたへ。「ハイ。藤間さんがお屋
変へお上んなさいまきたらう。せもりお屋変で致ませて「それは。
幸ひなのとでございませ。モウよ母どお上なさいましたらう
「ハイ。何か坊も二ざりません。それでも此子ハ好でござりませ

かゝ覚もよい振でござりまゝ次。ぺこ〳〵「おかゝさ芝居をお
ねどりでござりませう子「ハイ。完二彩見せましたが。今日は
お寺詣に連て来じまものさ。これが下ッて居ましたらね。
何角あまはきやせんで。モウ〳〵用がさつたり居付ません。
明日は早く。お屋敷へ上ました「ナゼエ。追願ひをなさつて。
完二三日お泊なさいまし子エ。お鍋さん。ヲホ〳〵。ポンニ私
どりへ此とおよしゆるさんまし。お答と一度能も友
遊ぶ「ハイ。有がたう。ポンニ釜さんもきつい成人でござん

ませ。毎日よくは稽古まお通ひなさりませ　ハイ。ゆう脊丈
だりのはやせ。をとなのしくございません。ヤレさらへ。ソレさらへと
ゆて。ゆうくさらひませ。兎角学精でなりませよ。それは
おまへさんまの。ゴ縁がなくてどうもは太公の口がたづきませ。
此方で上さいと思へば先さまへ御ざ。は意を入まばおちらで
ふ兼知なり。ぶくお同見えを出ましが。兎角は故障が
ございませ。ヲホヽヽ。なんぞうモウ世話なりのでございませよ。
ヲホヽヽ　イエサ。何ども縁づくでございませんか。なるは

お家なのがふかなさんまし。志りし子。作本公ハ有がとうござり
ませよ。殘るとなのしは行義がよくなりまして。内はおいそく
どのせうはせうまくやてゐ。お屈が取りませぬ。お屋敷さまへ
上ておきやさとぞ。おもそれが何処か遠て来りまして。それは
おまへさん子。此子が上ましたお屋敷さまハ。お高が紙所為
か作富貴ながらいつもおもてがひから何から万るのがふんどんで
ございアイ。それは親屋敷さまがいつもお家のよいお方で。
おれ[illegible]の子のせうはしつて。お世話なのさりませうら

五種新まうございました。リシテ奥様の作主を入りまして名前
お呼びなさるは。おちやッぴいや。お茶やくしお召様なりして。
お客様の入らせ申候は。此子を作吹聴様なさうぞ
ございました。誠に有がたいことでございました。幼かなら上て
やくしく厚い作恩を一生忘れてはいたしませんのさ。さりながら
肩類へ綺羅が張まして子。その上今までの名前へ賤ぐ
ちいさくなりましたし。何も角も只今かゝへ大人並に拵へ
直しましたから。イヤハヤ。大臣痛でございました

ございませうしたり隠ぐ順送りよりしてあのお子さ
の見古しいお妹子さ女のよなりまたらむざいございやせん。
夫へりうおとろざんのお痛ごそございまと称へ。ポンニ
ちつとおよそしやなさいまし。私どものお爺は地を弾せて
なんぞお踊なさいまし。チト洋見いてしようございまと八イ
ありがとうコレ出ぐさろをやしれ此子へや「ハイ有がとう
「お爺さんハお琴もなさいまと子「ハイ。生田を習せましたが。
此子は鬼駄さ女のゐうへ上しし。モウ中洋を取りましたヨ。
「そんな宜うござりまと。チトもおれなりよ「ハイ有がとう。

「それは冥りござりまさと。チトもおもなりは「ハイ有がとう。

ト別る●

[illegible]の女。ぜんぐりとした風俗。いろ白みてくちびるあつく。目のあちへ
[illegible]のぶりし。ロごまくろびりは[illegible]くぬり。ふといくろがいを白紙みてくるくとまき
[illegible]湯[illegible]のそらねさめなり●[illegible]

「お山さん。ゑらう宝いな。何ぼやと
トトモウ此ろそお腹の[illegible]合がつらうて。夜さり毎は按痛で
ぼくなのいのな。それじやさろん。風呂なと入て。温めて二年うそと
[illegible]ふてぱなァんぶも入ッてじやのなっお山さんあれ見ィ。お家さん
の傍に立て居るまさと嬰児さんを見イな。ありや何色じや
[illegible]ん「あれかエ。あれは紅かけ花色といふのさ「いろかう

雑(よ)う染(そめ)てじやなア　山「薄(うすき)紫(むらさき)といふ毋うなめんだいで

いれじ私へ　「いろうろう醉(よい)じや。おらや江(えど)戸むら衣なら

大好(ぞんき)くっきりや　あのきうるるとと着物(きりもの)がしてゐしヒヒ。お山

さんあつちや向(むき)んか　山「なすがしておくまか。夫(それ)おたぐりぢよ。

「なんのいナ。テモ雑(よ)把(そえ)てじやな　山いやよ。きッちやうな

志(しな)ぐ否(いや)ぶ。を　呑(の)んでも瘦(やせ)ないよ　「なのアア。把(そえ)が

雑(ぞ)じやうな　山「それでもおまへ。ぞうそりしやうこりり

なぎぞい　柳(なぎ)腰どさえいのじやアねえか　「いな。おらや

まつ。風(ぐまけ)員

上ぢゆん。敷じやさうい。塩がきうてトト甲くしんゆ。

上でゆへ。熬じやさうい。塩が辛うてトトせくしいしゃ。
上の拵方ハ又あるのいなめとなくいりんじやない。第一が薄
しらしらで吸物[illegible]さうい。酒の下酒ふなとせうものなら。
いつかう粧じや。こちや[illegible]大好く。鱣なども[illegible]南地のハ
和いだらりでもしるのいがナ。上の鱣といふこらまあ。どるのい
みりんじやい。名高い所がマア。京で上の生洲な。大坂て大
正ナ。その外に川魚屋もまだまあ多とあれどナ。[illegible]と
いへこら鮑等じや。何じやろとマア。鉄串にさして燿じや。

ハ。その燒と頭で袖袍づゝ切てナ。卒に入てぞろ志りと
蓋しく出さるゝに。ぷんぷでもさめるといふ案じがないわいナ
山
江戸じやア。そんなけちなるゝハ流れらねへのさ。
江戸前の樺燒ハ。ぷつぷと湯桑の立のを皿へなぶべて
出さしぶるうちにさめたらその侭喜て。お代りの燒立を
たべるが江戸子さあると描に持れて悉うと。牛の皮へ
包で海人ハ。よつぷど勘定を言な人さ。デおまさり夫が
マア。何で江戸子じやナ。物の癈になるんせうふしてアそ。

自慢したが独ないナ。いしとらしう江戸子じや何たら用
たら云ても。上の者の目からえてハ。トト女くたいじやが仲。
自慢らしういふ事が皆へとしたじや。だやふようて江戸子ハ
へげたれじゃといふないな。山へげたれでも独のさ。江戸ッ子の
ありがたさふハ。生を蕩ら死まで。生れた土地を一寸も
離を私くよ。アイ。おめへがたのやうに宗でうまれて大恨ハ
侍りたりさるぐにまだつれ思ひてもあけくのたてハ
がたいお江戸どうらけふまで着してゐるじやアねへかナ。

夫ぞうらおめへがこのる紙上方ぜへろくといふなぜへ
ろくとハなんのとろちやエ「さいろくト」さいろくとハなん
のとろちやエ「志まざハいてアな」冥東べいがさいろく
をぜへろくと。けしいな詞つ紙じやなア。お意外も。おアよ
げへ。飯音さまも。かんのんさゑ。なんのとろちやろな。
さうぞうら形ぞうらト。あのまア。からとハなんじやエ
「山」ろ」。ぞうら「から」さ。故といふとよ。そしてまた上方の
「さうい」とハなんぞへ「さうい」とハナ。物の境同じやハ。物の

而が境じやまよろて。さうじやさうな。形して境と云

隈和両が境じやまよろて。さうじやさるに。那しこ境と云
のじやのいな「山そんならいつうへ。江戸詞の「かしら」をとらひ
なめてるが。百人一首の哥に何とあるヱ「ゆしく。実う百人一首
じやアレハ一首じやない百人一首じやのいな。まごまア「志ゆく
ふん」ト いないで和母しいナ「山そりやア。ここが云損ぶも
志ろさ「ぞこねへじやない。云損じや。忍らふ咲ばらいナ。
芝居のどうなるに。今が完班ど観念何とらいふこう。大
別業能ねへ何の角のいふて。万葉の才義のとぎろ

ぞな男が云ふてじ母がひかり人のなのいさろん。よう漱んである
「山そりやく。上方もつるひく。ひかり人ッサ。ひかるとハ稲妻
りへ。おつぎ子ヱ。江戸ぢハ叱るといふのさ。アイそんな片言ハヤ
ません「ぎろたひかる。なるほどこりや私が語ぞしこら
其百人一首ハ何のこちやヱ「山からトいふ詞の訳さ。紙
お吹なよ。百人一首の哥よ。文屋康秀吹からよ。秋の艸
木の志あるればトあるよ。ソレ吹からよ。子。よしかく。吹ゆゑ。
いふ上を吹からふさ。なんぞ上方でさろいくと云ても。吹こうい。
秋の草木の志あればとハ。詠ハいてやせん「なるほどさう

秋の美の本の志同れがとは。詠はいてやせん「なるほさうぢさや
おまへのごろんまなむらしのが。ハテ云や何でもいへしるわいな。
「山ぞぞじゅうぶ大就然だもなんでも。利口をぢうといつたり。主流を
ぎろん。狐をけつねといふ。より絵のさ。人音相通とう。何
とうじかうのつてゐるから。むりじやア絵へと。此中も博識な
人がおれなのしぶろけ。延引ぶの説音ぶのとあいうれを
の上へむの字が望れば。人青相通で。恩愛。説音。延引。
吾悪なぞいふものぞと。絵教なのとうしたら。[illegible]

が江戸詞を笑ッとら一歳志めてやらうと思つて。行くぬさ
ハな「さうかいな。そんなのらまア。かんのんも独ハト。からも
独ハト。叔さまと冥東べいじやどうしべい。新しべい。行べい。
なるべいとハ。叔又とうむないナア「それも子。万葉集と
やらその外神事の時分の本ふ子。へゆく詞のなとさ。可と
ハ可といふことで。行べい。なるべいはそ。可行可帰といふ詞て。いま
でも萬葉とやらの哥よりハ。べい詞を書ふさうさ。ものなるも
諸の[illegible]。内へ出付て[illegible]。その哥や詞を来

て見なせ。鄙言の。何ちふことぶの。角ちふことぶのといふのも。
ちふとは「とりの」とりふ詞を詰るので古い詞ぶりに相ありい
とおしぶよ「なんのいナ。ぐいく詞が何で訳がありぞいナ。
「訳がなくってさうそなりうちが内へ来て書付を
見なせ。「ハア。ちとうんよりいナ。何なと賭にせうりい。私が
まけしらナ。醴なと。大猫餅なと立ちよりいナ。おまへ又
何なと立えんせ「立るとい「振舞の夏ちや「おぢる
のう「さいなら「ムヽ。うちが負まけまゝ鐔を鈍来ちんぐまゝ

「かく」エヽヤ能かひなァ「山」ァいゝとも〳〵。ヲヽいゝひよ、おめへがまァ。
鋼手ふ業つて脊中を痛くおさへうぞよ。ゾウよいよ。
「かく」ハイ〳〵。指子まかつてきんど「山」サアおまへの脊中を
お出「かく」又送飯ぐ〳〵よ。名つよいまことのでや。是とずじ出の
ならおさんァいさ。アいゝ。アいゝ。畜性なおかなァ。いゝつと面倒の
放ておくんせェ。アいゝ。アいゝ。何しの若いかな。痛さがまゝんかな。
釜へがめるさぐん。味噌すずいなァいゝ〳〵〳〵。
どありの六女。おくさんの赤子をあげるめのござりますをがませて。ひとゝ
のまゝのあげちら〳〵とひろつてみるうへ、七八方をわしらみてござ菜

たりなる娘の子。四五人えのしまえやけの貝屋所を立て番笛の
のへてをしき。おふえんをきせてねりおきぞ。紙でうらくしき
嶋田。丸まげ。修田ふづし。長大ぶしなどの
のねさまへ附木で拵と擲がうがいをさし。

すげゆひの
笛をもぬし
ちゐりし

て、ごしやくなエをしやぐり
なぐり。おとうまりエをしてゐる

「坊や。おとなしく鍋んねしや。朝
起くしたら。お同覚よお薩をやらうヨ。ヲヤく又おきたら。
なぜ寝ねへのう。お夏さんく。ヲヤさうじやアなうつて。お隣
のおうさんへ。貴りね私どもの内の坊ハ子。どうも啼てなり
ませんよ「そんなら灸を居て。おやんなさいまし「ハイく。ぬくや
こうしいよ。灸ごと。すくこのいの。早く寝しな。めくんぢいが来るよ。

ハイく。坊ハ寄り寝いてまして●中でもいちつるのふくまれゆゑ年下の子をなりせよ。さぶくの

よい中を引さいとりとる。れ身のおしやべりあまゐて。大あがさのおふくといふむこをあ。

此仲ヶ子の子どもがしらなり。あをうだなをよこなぞして。その母をひざのあたりへ

てきりつけ「おあく」ヨヤくしく。ゴろちやア否。ゴろちやア いや。おたる

ながら

さんなんざア虫の秘ねへ。おまへハおりえさんじやアなりいよ。お夏

さんとこしがおりえさんで子。おまへハお三どんざものを。於く

お秋さん中でもお幼よ「アさうざよ。於へお夏さん中でも

ぐらしらべいお杜 アさうもの

「おなつ」どうぞ私ハしんよ「おたる」ヨヤくしく。ざうじやアなりいよ。先刻の

さうぞ

俺じやア私がおりえさんな筈ぞよ。私ハ夫じやア否。おまへ

ゑ拄なるべよ。あまへつくうちまさ「ア」紙よ。おまくがお拄びでなく
てゐ紙紙へおふくさん「ア」紙のこ。根からこまらねへ子ヱ「お
たるさん嫌忍してお拄びナ。お三どんに旅ろて。皆が代表
るぐろ紙のな。又紙へおくさんにおなりな「ろ」ちん否。
おふくさんやおふゆさんがあんなる紙お云ぐものを「ふゆ」ちくしが
何とかまして「いまお云ひじやアないか「紙のな打遣て
おむ。あんなものにお搆でない「そんなら。今しがこ上さ物を
お返し「ア」返さよ。こんな様いものハ入らないよ ト 今ごれの小ごれを

みけざとう「お冬さんも先刻の物をお返し「アイト[illegible]
つくね「三味線の糸屑なんぞを何よりありがたがるおふさん
まる「よひのさ今夜ゟ何を弄ろとお思でも安りやア志ほから
かく「びくびくびくひイリリト三味線をひきかゝえて「まちいちまちさらばや
みよ「まあ主婆さや。どうかどうぞ今年のどろばう
由「由郎がかのさね「まる「いろ私がどうかしたエ「みよ「まあ叢うけ婆さまよ
茶ア呑ましよ。「まる「叢うけなどでアお茶アのままよ「まる「叢うけ
由「のいまさい世話をやアありやせエん。ト三味線を「ある「あき大

ゑんくこゑちくお出しの裁を上せう「アイおりてじけよ
「おまくとことと拝げうねへ。お隣るのをしませう「アヽ
「ざまアみろ。お秋のべらぼうめ。お夏さんとお冬さんハお出
でるのいよ。ころちとお拝び。何を殺さう「アヽ毬を突ませう
「よいねへ。おまくと二人でお儀るのせうねへ「アヽあんなてる條
ハ志んに入るのいよのうお秋さん「サアくころちハ毬をんじめ
ませう「中をお連りナ喧嘩をさるのんじやアるのいよ「秋
よ。ザアく諷ツてお呉さ。皆がお諷ひ一二。三四。五六。七八

あハ。九と一十ヤ。廿ヤ卅ヤ。四十ヤ。五十ヤ。六十ヤ。七十ヤ。
八十ヤ九十九貫目おもさ三六。てうどお月の前で百番
すもゝ。一二。三四五六八。ヨイ旅さ。ト「おまへが一で。
私が二さ。お冬さんへ三ぞよ「サア。何よ殺さうね。大門口ろ
いさう。大門口。揚屋町。三浦高浦楽屋の君。皆さ道中
えぞみをふりさけ見よなうる花紫。桐川清川あい逢染
川。錦あへせて新田の川。めのせ。このせ。ぢうこのも。向えイさ。
川えイさい。帆掛船が二艘續くあの舟

心安布栄せて。ほうら家形が押かけるヤレ留ろ。私は留ろ。
留ろ海等は五斛まるぞ。五斛入らぬ三五斛入らぬ。
まいらよかまふと日が暮れる。日は暮れるお月は出ずる。夫
で後江のおん公。それ百よそれ二イ百よそれ三百よ。中略
とぢめてく一貫貸しませんそうせん。大紺屋のおこそまさ
ハ。且那も大八さアまもさよなのら清ぬ六角堂大格子の
松の蔭で。おひとの声が見て候よ。ワレ百よ アイ蔭まし
。お白のサア。おんまろ白く白木やのお弱さんウ。才三さんウ。見せ

あへ丈八なりひ華「アヽ落こ●えェん遠州たやいちごドや
のウ。油ゆんしゝ孫じゃといふてヱ。いふまいりまぬ伊達なるる
男ウ。夏も足袋たくだらをのせきごァ。およろりくと
およろたくだらり「ヲヤ落しこ。そ業腹な▲「絵京味ぶ
ねへ●「うつちまつておきやアがれ。おちやつぴいめ。今夜わ子。
お夏さん。京く京橋中く中橋。おつや十六大振袖より。
あの奇ませう子ヱ「アヽそれがよいよ▲ちらのふさりハとなり同士をしてゐる「お儂
おくそさん御免なさいやし「ハイ。お出なさいましゴレハ

とちらへお上んなさいます「ハイ。お是は赤の服でござい
ますが。アラざろとお祝ひやまを「ハイく。ぴ叮嚀なお拵へ
なさいましたれへ「まんとお給なさいます ト 帯をあへまなしてあるれもめんで
拵へ花のさるをせおひたりしどうも坊が啼出でございますもうら。
うさをうらひなが ら
迷惑でございますも。ちよろとお山を見せるのがら小便をせり
ますせう。爰が木や花のえんとあるお山ぐッサね。よいく。よいく。
ちがぞんぐ橋を渡る所ぐッサ。サア実うお山からぞんぐ鳴る
所ぐよ。サア小便しな。シイリ「おきまえ。おいらんなさいます

たる「アレサ。まぐ汚くねへ所ぐのな。今お山に居てお花見の所ぐ
ものを●まりをつく女の子とちらをまして。「ざまア。已アいく。荻子坊をお
おかえさんが何所にあるもんか。お冬さんあれおれ。箒をお
ぺきまつて箸にして。豆猿口で荻を搭口して。赤の飯で
どぶ無いまちも。おかえちゃん。已ぶ無つと。ざまア。ト らちびるをひ川で
たちまね「嘘夏ぐらら是でも袖ねへお秋さん。○子もりの女
子もり「おかくさんいぢの悪いる最云なさんナ。熱体おめへ少
有をいぢめらア。皆が中を袖くしてお拝びそんなに別くよ

ゐのるめへ仲間割がする。一所になつておむすび「アイ「いゝら

ざるおせうご講やアぐんな目腐めエ「ボンニく めくされ子ぞ

のうをれがゆへ男の子になぶられらア。めくされめまとへおめへの

ろのぐ「おまへがめくされがうぬがせうふかのあるめへか。ピヨイトつきこと云なり

て門ト口へかけだし。三足ばかりのくゝとごろつとかけよりして。いちめくさんを内へかけそ

行。中途できせうのするが。あが内のあどだちよび又あるきかあわして。ワアく

ワア引「まんあが私の内へお出ぞかの「ア寒からう「これも寒かろう

「母 おまへさんどうでもおまへ入まておくれる「アおまへも御出ぞ

うちゆうへかゝやく。ぶうちうちべいアをもお。「おいらア内イ行く行

むかもめとめれこりんぞしらする声とめげ

蛙（ひる）が鳴（なく）よ。おいらアうウちイけへろ。

蛙（ひる）が鳴（なく）よ。

貸本屋

浮世風呂二編巻之上終

8N-3
"N4"
Sh. 34
z
9807

[illegible]
[illegible]
[illegible]呂二編卷之上

国立国語研究所
1001129731